

報告書名：歯科臨床における科学的根拠の蓄積のための、患者口腔内の歯科材料の生存時間
分析-マルチレベル Cox 比例ハザードモデルを用いたアプローチ-

研究者名：青山貴則、相田 潤、森田 学

所 属：北海道大学大学院歯学研究科口腔健康科学講座予防歯科学教室

【目的】

修復物の予後が良好であれば二次う蝕の発生の予防、歯髄や歯牙自体の保存につながる。欧米では、普遍性・客観性を考慮して、修復物の予後を調査したものがいくつか報告されている。しかし、日本では独自の保険制度の存在や、頻用されている材料が海外と異なることから、それらの結果をそのまま臨床に当てはめることは難しい。また、国内の調査もあるが、調査対象数が少ないのに加えて、大学病院の受診者を対象としているものが多い。

本研究では、歯科臨床における修復物選択の参考となることを目的に、開業医歯科医院において、修復物の臨床成績に関して生存分析の手法を用いて調査した。

【対象および方法】

1991年1月1日～2003年3月31日に、開業歯科医院にて修復治療を受け（エントリー）、その後再来院した患者134名（1,010歯）を対象とした。調査した修復物の種類はコンポジットレジン、メタルインレー、4/5冠、メタルクラウン、硬質レジン前装冠、硬質レジンジャケット冠、メタルブリッジとした。生存時間は修復物が充填もしくは装着された日より、再治療もしくは患歯に抜歯が必要であると判断された日（アウトカム）までを算出した。再治療や抜歯が行われなかった場合は最終来院日を観察打ち切りとした。再治療や抜歯の理由を、う蝕、根尖病巣、歯周病、歯髄炎、便宜的な治療、その他（審美障害など）の6種類に分類した。分析はKaplan-Meier法により、各修復物の累積生存曲線を求めた。また、Cox比例ハザードモデルを用い、宿主要因（部位、年齢、性別）を調整した後に累積生存曲線を求めた。解析にはSPSSver11.0を使用した。

【結果および考察】

平均生存時間は、硬質レジン前装冠が2415日と最も短く、次にメタルブリッジ、メタルクラウン、4/5冠、硬質レジンジャケット冠、コンポジットレジン、そしてメタルインレーの順に長くなっていた。コンポジットレジン、メタルインレーに関してはう蝕が再治療または抜歯の原因の70%以上をしめていた。患者の性別・年齢、治療部位を調整した後に、各修復物位の生存曲線を求めた結果、ブリッジのみ、他の修復物と比較して有意に予後不良だった。メタルブリッジでは支台歯ごとに予後を判定しているため、その支台歯に問題がなくとも他の支台歯に問題があるために再治療の対象となることがある。また、失活している歯が用いられることが多い。それらの事が、他の修復物より生存時間が短くなった原因ではないかと考えられる。

【まとめ】開業歯科医院において、134名（1,010歯）を対象に修復物の臨床成績に関して、生存期間を調査した。その結果、ブリッジが他の修復物と比較して予後不良であることが明らかとなった。今後は、生存時間に影響する要因を検討する予定である。